

令和元年度霧ヶ峰自然保全再生作業におけるモニタリング調査結果報告（概要）
（平成 26 年度～平成 30 年度生物多様性保全推進支援事業を含む）

信州大学農学部 大窪久美子

1. 目的

本調査は平成 25 年度策定の霧ヶ峰自然保全再生実施計画及び個別作業計画に基づく作業についての効果を検証し、得られた知見等を他の地区でも活用することにより、霧ヶ峰全体の草原環境の保全再生を図り、計画を達成するためのモニタリングを目的とするものである。今年度の調査は H26 年度から H30 年度に実施された再生作業を最終的に検証し、さらに次期の作業の効果を引き続きモニタリングする上で重要である。ここでは、結果の概要を報告する。

2. 方法

(1) 外来植物駆除

モデル地区（対象種）：強清水湿原（オオハンゴンソウ）

強清水園地（ヘラバヒメジョオン、メマツヨイグサ）

H26 年～H30 年の 6 月～8 月に抜根（掘り取り）や刈取り等の駆除作業を 5 年連続で実施した。モニタリング調査区では今年度も同様の処理が行われた。また、処理前にモニタリング調査が実施された。ヘラバヒメジョオンとメマツヨイグサの駆除処理は今年度から再生作業として実施されなくなった。

(2) ススキ群落・ニッコウザサ群落

モデル地区（対象群落）：強清水園地（ススキ群落）・新規調査プロット追加

車山肩（ニッコウザサ群落）・新規調査プロット追加

H26 年～H30 年の 9 月（一部 8 月）に刈り取り作業が 5 年連続で実施された。今年度については、優占種を抑制する効果があると考えられる 8 月末に作業が実施された。また、8 月刈り取りの効果を検証するため、モニタリング調査プロットが新規に設定された。

(3) 調査方法

今年度のモニタリングとして植生調査と立地環境調査が実施された。植生調査の各プロットの面積は 1m×1m (1 m²) とし、植物社会学的植生調査を実施するとともに、各出現種の植物高を測定した。立地環境調査（相対光量子密度及び土壌含水率、土壌硬度）については、プロット内で反復は 5 回でランダムに測定した。ススキ群落とニッコウザサ群落について、H30 年度まで土田勝義先生が調査されたデータを今回は引用させていただいた。

3. 結果

(1) 外来植物駆除

駆除処理の結果、オオハンゴンソウおよびヘラバヒメジョオン、メマツヨイグサは初年度より減少し、処理の効果が認められた。また、本種や他の外来種の新たな侵入を抑制するためには、作業時の土壌かく乱の防止を徹底することの課題が指摘された。オオハンゴンソウの駆除については、処理の頻度を増やし、集中的に実施することが必要と考えられた。

(2) ススキ群落・ニッコウザサ群落

ススキ群落については、刈り取り処理により、ススキの被度は減少し、目的となる草原性草本植物の出現種数が増加した。また、ニッコウザサ群落についても、刈り取り処理によって、ニッコウザサの優占度は減少し、草原性植物は増加した。しかし、ススキ群落では草原性草本植物と生育特性が近い、外来植物のヘラバヒメジョオンとメマツヨイグサが逆に優占する可能性も考えられた。そのため、外来植物の駆除を同時に実施することや、今後もモニタリングで群落の変化を把握する必要があると考えられた。